

論文の内容の要旨

論文題目：文学テキストにおける「わかりやすさ」の言語学的分析

－テキスト分析への学際的アプローチ－

氏 名 奥 聡 一 郎

本論文は英語で書かれた文学テキストの「わかりやすさ」(comprehensibility)を学際的な観点から検討・分析を試みたものである。

本論文の構成は下記の通りである。第1章から第2章では、分析の枠組みを検討する。文体論、言語学の観点から、「わかりやすさ」を解明する上で読み手の認知過程に着目する必要性を論じ、新たな枠組みの設定を試みる。第3章ではテキスト理解における心理学の先行研究と言語学的な参照枠の接点として語彙的文法的結束構造に焦点をあて、従来の計量文体論でなされてきた単純な分布や割合からでは読み手の不在という点でテキストの分析における効果の実証が不十分であることを論じる。続いて、「わかりやすさ」が読み手の理解過程の負荷の観点から、テキストの結束構造(cohesion)の質的な分析によって明らかにできることを述べる。第4章では分析の枠組みの一般性を主張するために、文学テキストや多様なジャンルのテキスト分析を通して、量的かつ質的な分析と操作から得られた数値を統計的に検証し、比較対照を行う。同じ作家による子供向き、大人向きの作品の対照分析も行い、「わかりやすさ」の検証が同じ枠組みで援用可能であること示す。第5章では、今後の展望として「わかりやすさ」の概念が言語教育への応用として、効果的な文を書く上で指導の一指針になる点を指摘する。

はじめに、本研究における用語の理論的な問題を論じ、定義の検討を行う。「読む」(read)と「理解する」(comprehend)という用語は広範な研究領域にまたがって使用されているが、これまでの定義を再検討することによって、「わかりやすさ」

が「読み」(reading)の範疇およびテキスト理解の範疇で論じるべき概念であることを述べる。文体論では、書き手の立場から文学テキストの言語や技法を対象に、もっぱら言語学の枠組みを用いた記述と分析が行われてきたが、現在では認知科学、心理学の発展に伴い、読み手を取りまく状況を分析の考慮に入れることも可能になってきた。文体論の分野も読み手の理解を基礎に分野を横断的考察によってより精緻かつ十全な水準を目指すことができる。学際的研究を行うことは、各分野に深い理解がなされていなくてはならず、特定の一分野を考究するより困難が伴う。しかしながら、「読む」という行為の認知的過程を研究してきた心理学と応用言語学、そして文体論とテキストの構造を扱う言語学の融合はコミュニケーションの立場からもこれからの進展が望まれる分野であると結論づけた。

本論の中心となる概念である「わかりやすさ」の諸相を「読みやすさ」(readability)の概念と比較対照し、明らかにすることから始めた。「読みやすさ」は、語の音節数や文の長さを基準とした語彙文法レベルの概念であるのに対し、「わかりやすさ」は読み手の認知過程も視野に入れたテキストレベルでの特質であると定義づけた。

「読みやすさ」についてはこれまで多くの先行研究があり、「読みやすさ」を客観的な数値で示そうとする試みがなされてきた。その中で多くの公式が開発され、読書教材や公文書作成の指標として活用されている。しかし、公式では数値化しやすい要素、すなわち先にあげた語彙文法的な基準のみで「読みやすさ」を測ることになる。その点で数多くの批判がなされてきており、文構造や語形成の複雑さと言語理解の難易度には絶対的な関連性が低いことなど、公式の不備が指摘されている。この「読みやすさ」と読者の理解度には大きな乖離があるのではないかという疑問が本論の研究動機に至ることになった。「わかりやすさ」の概念導入とテキストレベルの言語要素の分析によってテキストの「わかりやすさ」を測ることが「読みやすさ」の問題点を克服するものと考えた。

次に「わかりやすさ」が書き手、読み手、言語のレベル間でいかに関与するかを概観し、言語理解に関する先行研究を批判的に検討した。Propositional analysis, schema theory など統語的な項の特質に還元される問題点や読み手の知識の有無を分析に組み込むことの限界を論じた。

「わかりやすさ」がテキストレベルの特質であることから、テキスト性とテキストに関わる言語学の貢献を概観し、首尾一貫性・結束性(coherence)、結束構造(cohesion)などの言語的な手がかりが「わかりやすさ」の指標になりうることを示し、分析の枠組みの構築をすすめた。また、結束構造がこれまでにどのような形でテキスト分析に応用されてきたか、その問題点も指摘した。単なる結束構造の多寡の傾向や図による印象、分析対象となるテキスト量の少なさの問題を取り上げ、それらを超えたテキスト分析の構築にはコーパス言語学や統計的な処理も

必要であることを論じた。また、認知科学に基づくテキスト(文章)理解とテキスト言語学、機能主義言語学に基づく言語記述の枠組みも援用し、両分野にまたがる語彙的文法的結束構造である代名詞、省略、繰り返しなどの照応関係、接続詞などの接続関係を中心とした分析方法を論じた。

まず、文学テキストの「わかりやすさ」を「首尾一貫性、結束性」(coherence)の程度差と捉え、読み手の理解にいたる過程において先行表現を同定する際の負荷の相対的な算定基準であるパラメータを措定した。一つ一つの照応関係についてどの程度の同定に難易度がみられるか、パラメータが関わる度合いの平均値を算出した。パラメータには照応詞に備わっている性、数、有性の無性の区別、品詞の認定、また先行詞には同一性、長さ、競合、距離などが考えられる。読み手には因果関係、継起、類推を含む複雑な認知過程を想定し、これらの積極的関与、消極的関与に分け、全てのパラメータの総和と平均で「わかりやすさ」を測った。検出された数値がそれぞれの対象とするテキスト群の比較において有意な差が生じれば、「わかりやすさ」を明らかにする基準として枠組みの妥当性が認められることになる結論した。

さらに実際のテキスト分析を通して、「読みやすさ」の批判点を超える指標としての「わかりやすさ」の妥当性を論証した。まず、結束構造以外の語彙的統語的指標として、時制、アスペクト、態、動詞の意味的な特性、また文の構造的な語順異常、比喻表現、Mann & Thompson(1988)によるテキスト構造の表示理論であるレトリック構造理論(Rhetorical Structure Theory)などの視点から一般文学作品や児童文学作品を教材化したリトールド版のテキストの対照分析を試みた。関連する語彙頻度を数えるという手作業による分析では大量のテキストが処理できないことや対象群では頻度に決定的な違いが見られないことからこれらの指標では「わかりやすさ」の測定が難しいという結論に至った。次の段階では先に構築した結束構造を用いた分析に枠組みを用いて分析を行った。

リトールド版では語彙や文法の基準に沿ってレベル化が行われ、学習者への教材選定を容易にしている。しかしながら、その文法項目や語彙の基準は「読みやすさ」の指標として用いられるものであり、テキストレベルでの「わかりやすさ」を保証するものではない。例えば、Louisa Alcottによる *Little Women* (1868) (=Little.txt)と Charles Dickens の *A Tale of Two Cities* (1859) (=Two.txt)、を比較した場合、後者は一般の読者を対象として出版された作品であり、同じレベルにリトールドされたとしてもその「わかりやすさ」には差があると考えられる。まず、「読みやすさ」を示す公式の中から 0 から 100 の数値で読みやすさの程度を示す Flesch-Reading Ease Score(=FS)、読書教材として採用するのに適当なアメリカでの学年を示す Flesch-Kincaid Grade Level (=FKGL)と Gunning's Fog Level (=GFL)を比較することから始めた。対象とするテキストをコンピュータ可

読のテキストファイルにまとめ、*Grammatik5*という英文添削ソフトを用いて算出した。Little.txtではFSが86、FKGLが5、GFLが7という数値に対し、Two.txtではFSが86、FKGLが4、GFLが7と両方のテキストの方がほとんど同じ「読みやすさ」という結果が出た。その数値の僅少差は「読みやすさ」の公式の一応の妥当性として評価しうるが、テキストの「わかりやすさ」は異なると考えた。「わかりやすさ」の分析の枠組みを援用すればその差異を明らかにできるのではないかと仮定し、同じ2種類のテキストをさらに分析してみた。その結果、代名詞 *he(his/him/himself)*, *she(her/herself)*, *it(its/itself)*, *they(their/them/them-selves)*を keyword に、分析ソフトの *WordSmith*を用いてコンコードンスを作成し、その中から文を越えたテキストレベルでの照応関係にある代名詞と抜き出した上で、その先行詞を同定するまでの読み手にかかる総体的な負荷を「パラメータ」の平均値で表した。テキストレベルの代名詞の頻度とパラメータの平均値が以下の表にまとめられる。

Text	FS	FKGL	GFL	<i>he</i> (頻度)	<i>she</i> (頻度)	<i>It</i> (頻度)	<i>They</i> (頻度)	文の総数
Little	86	5	7	3.25(12)	3.55(22)	0.4(13)	1.38(9)	132
Two	86	4	7	3.45(22)	3.6(20)	0.5(8)	1.75(8)	141

代名詞の先行表現同定にかかる負荷と文全体における生起頻度から数値が大きければ大きいほどテキストの「わかりやすさ」の程度が低まると考えられる。以上の表から「読みやすさ」の公式による数値よりも「わかりやすさ」として測定したの数値の差の方が明確であり、この両テキスト間の数値の差は統計学的な検定を行っても有意であった。この分析では「読みやすさ」で測定できない差異をテキストレベルの指標による「わかりやすさ」の観点から示すことができたが、さらに多様、大量のテキスト分析から妥当性を示すことを試みた。本論文では2つのテキストの「わかりやすさ」を相対的に示す上で有効であることを12組の24テキストの対照分析を通して明らかにした。聖書やナンセンスなどのジャンルについては想定した数値がでなかったがこれはジャンルに特有な性格によるものであろう。

接続表現に関しては *and*, *but*, *yet*, *though*, *however*, *so*, *then*, *for*, *because*などの代表的なものに関して concordance を作成し、additive, temporal, adversative, causal の関係毎に分類した。テキストの分析から考察すると adversative, causal relations に「わかりやすさ」の指標となりうる結果がでた。さらに接続関係を精緻に分類して、認知過程との知見を生かした分析方法が可能であろうと思われる。

結論としては本論のまとめ及び展望をテキスト分析への貢献、言語教育の視点から述べ、本研究の目的が達せられたことを論じた。